

令和6年度第2回指宿市史編さん委員会（通算3回目） 会議録

■開催日時

令和7年1月24日（金）9時30分開会
11時30分閉会

■開催場所

指宿市役所 市長応接室

■出席者

委員長：打越 あかし（市長）
副委員長：松下 尚明（山川地域代表）
委員：田之上 典昭（教育長）、永山 修一（学識経験を有するもの）
岩本 一宏（指宿地域代表）、渡部 徹也（市総務部長）
下吹越 かおる（指宿図書館長）

■欠席者

委員：坂上 次喜（開聞地域代表）、紺屋 聖一（市教育部長）

■会議に出席した事務局職員及び委託業者

総務課長兼市史編さん室長	濱上 和也
総務課市史編さん室市史編さん係長	上村 真史
〃 主査	上川路 隆介
株式会社ぎょうせい九州支社 出版営業課係長	鈴木 理
〃 主任執筆員	楠木 俊一

■会議次第

- 1 開会
- 2 市長あいさつ
- 3 編集委員会及び編集専門部会設置等について（報告）
- 4 議題
 - (1) 執筆者及び章立てについて
 - (2) 今後のスケジュールについて
 - (3) その他
- 5 その他
- 6 閉会

■会議要旨

- 1 開会
- 2 市長あいさつ
- 3 編集委員会及び編集専門部会設置等について（報告）
（事務局）

資料の1ページ。編集委員会及び編集専門部会設置等について報告する。前回、7月5日の市史編さん委員会の後、8月1日に各専門分野のリーダーで構成する編集委員会の委員を委嘱し、編集委員会、それから編集専門部会を設置した。任期は令和6年8月1日から、当該市史編さん事業が終了するまでとしている。

構成する委員は、資料2ページのとおり。左から、役職、編集専門部会名、編集委員名、所属等、事務局の担当を記載している。

次に、8月24日、第1回編集委員会を谷山市民会館において開催した。この会で、編集委員長が永山修一先生、委員長の職務代理者が中世部会の栗林文夫先生に決まった。会議の内容については、資料のとおり、これまで編さん委員会で意見を伺い、決めてきた編さんの目的、事業方針について、章立て、ページ割、執筆者の選任について説明、協議をした。委員からは、要約版の作成やデジタルの活用については賛成、指宿の特徴を市史に反映させた方が良く、分野をまたがる事項や時代区分について、集めた資料の保存・公開・活用やそのための体制などについて、意見を頂いた。

次に、今後、市役所各部署から、様々な資料を集める必要があるため、10月3日に係長級以上を対象に、指宿市史編さん事業説明会を開催した。そこでは、市長にもあいさつをいただき、市史編さんの重要性を直接伝えていただいた。96名の参加だった。

次に、12月1日、第2回目の編集委員会を鴨池公民館にて開催した。この会議では、執筆候補者案、章立て案、ページ割について、また、今後のスケジュールについて協議をした。委員からは、各部会の執筆候補者の選定状況を報告していただいた。また、時代区分や通史編第3巻の構成などについて話し合われた。

最後に、令和7年1月1日付けで、編集専門部会委員の委嘱を行った。委嘱期間は、令和7年1月1日から当該市史編さん事業が終了するまでとしている。委員については、資料の3ページ、4ページに掲載している。

(松下副委員長)

報告に違和感がある。第1回目の市史編さん委員会で、事務局が委員の委嘱を進めるという協議は行った。だが、編さん委員会で確認を取らないままに、市の広報いぶすきに編集委員会委員の紹介が掲載された。編さん委員会に対しては事後報告である。つまり、何のために編さん委員会があるのか。議論することに編さん委員会の任務がある。編さん委員は報告を受けるだけでいいのか。

(事務局)

編さん委員会は「指宿市史編さん委員会等設置要綱」に基づいて設置しており、その所掌事務としては、市史編さん方針及び刊行計画に関することやその他市史編さんに関し必要な事項とある。前回の市史編さん委員会で、委員の選任については、事務局に一任していただくことで了承いただいた。

(松下副委員長)

事務局が事務を進めていくのは当たり前。だけれども、市民に広報する前に市史編さん委員会で協議したうえで、広報紙に掲載すべきだった。編さん委員会の役割が分からなくなる。

もっと言えば委託事業者についても、編さん委員会で協議をするべきだった。事務局で淡々と進めたい気持ちは分かるが、編さん委員に関与させないままに進めることには反対である。

(事務局)

ご意見ありがとうございます。ただ、委員委嘱など既に進めており、市民へ周知をしている。人選をやり直すのは難しい。今後は編さん委員会に必要なことを図り、事業を進めていきたい。

(松下副委員長)

編さん委員会がどのような権限をもつ組織なのか、事務局や編さん委員が知っておいた方が良く、報告だけ受けて終わりになってしまう。市民の関与という点で問題がある。事務局が先行しているので、手続きをしっかりとしたい。何のために私たちがいるのか。これまでの編さん委員会でも同じ事、同じ趣旨の発言をしている。

(事務局)

設置要綱を作成した時に、編さん委員会、編集委員会、編集専門部会、各組織の役割を決めた。編さん委員会では、大きな方針、方向性を決めていただく、具体的な執筆者は、編集委員会で決めるという仕組み作りをした。

(松下副委員長)

編さん委員会で大きな方針、方向性を決めるということだったが、どのような委員に委嘱するかは、大きな方針、方向性に密接に関わる。

(事務局)

のちほどの協議で執筆者を紹介する。執筆者は事務局の章立て案をもとに、各専門部会長が選考したもの。章立てについてご意見をいただきたい。意見は編集委員会に伝え、協議し、場合によっては執筆者を追加する。

(市長(委員長))

今の議論は、決定した内容の問題ではなく、手続きの問題。執筆者の選任を事務局・編集委員会に任せることは、前回の編さん委員会で了承している。事務局は編さん委員に最初に説明し、納得と了解の上で、市民に発表するなど、次に進むようにして欲しい。

(永山委員)

編集委員会の発足を8月までにしてほしいということは、私から強く要望した。発足から執筆者を選考し12月には執筆者が固まった。平行して予算に関する協議も行った。もし、編さん委員会の確認が必要ならば、会自体を8月から9月に開催しなければならなかった。

(松下副委員長)

そのとおり。昨年度の第1回目に発言したが、編さん委員会は年2回では足りない。編集委員会並みとは言わないが、折々で議論をしないと違った方向へ進む。

(市長(委員長))

今後は節々に判断して、委員を招集し会議を行いたい。

4 議題

(議長(委員長))

それでは、協議の議事進行を行う。本日は、会議次第のとおり、3つの議題がある。各委員の忌憚のない意見を願います。

まず、議題(1)「執筆者及び章立てについて」事務局の説明をお願いします。

(事務局)

資料の3ページ、4ページ。

執筆者について説明する。自然、先史、古代、中世、近世、近代、現代の分野に分けている。事務局の章立て案をもとに各専門分野のリーダーとなる先生方が、執筆者の選定を行い、市長が委嘱している。資料は、左の欄から、専門部会名、氏名、研究内容となっており、備考に所属を記載している。自然部会が成尾先生を始め10人、先史部会が大西先生を始め4人、古代部会が永山先生を始め6人、中世部会が栗林先生を始め3人、近世部会が林先生を始め6人、近代部会が平井先生を始め6人、民俗部会が松原先生を始め9人となっており、合計44名を委嘱している。

次に4ページの専門部会史料編2についてだが、こちらは通史編に先だって発行する史料編2の部会となる。史料編2は、江戸後期に指宿の地頭仮屋に務めていた前田勘助の日記を通じて当時の生活の様子を知りうるもの。日記は古文書になるので、古文書を読み解く部会になる。

資料の5ページから、指宿市史通史編の章立て案となる。この章立て案は、各専門部会長から提出されたものと事務局案を組み合わせたものだ。市史の現時点での設計図となる。同時に今後、調査や取材などに応じて変わっていく。

資料5ページ目の1行目に第1巻通史編①「市の概要と自然史」とある。「1 市の概要」からはじまる。下の数字「18」は、想定ページ数となる。次に「2 自然史」となる。章立ては、地形、地質、地震活動、植物、以降に動物、魚類などが続く。全体的に、写真を多用し、図鑑のような構成となる。指宿市の絶滅危惧種や特有の外来種について

も紹介する。自然部会の成尾部会長からは、「指宿は多くの火山・豊富な温泉と名実共に火山の博物館。火山に育まれた植物・動物・昆虫など豊かな自然環境を余すことなく盛り込みます」というコメントをいただいている。

次の「3 先史時代」から第2巻目となる。先史時代は、約140ページを想定している。旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代と続く。内容としては、大陸から日本列島への人類の到達、そして定着、火山噴火、暮らし、文化などこれまで発掘された遺跡や遺物をもとに執筆される。大西部会長からは「考古学だけではなくさまざまな関連分野と連携し、興味深く読んでもらえる物にしたい」というコメントをいただいた。

次は「4 古代」となる。資料7ページ、7世紀から11世紀までを中心に描かれる。隼人と朝廷の関係について書かれるほか、第5章では、(特論)開聞岳「紫コラ噴火をめぐって」と、874年の開聞岳噴火についての見解が示される。永山部会長からは「最新の研究成果を盛り込み、しかも分かりやすい市史を目指したい」というコメントをいただいた。

次は「5 中世」、鎌倉時代から戦国時代までの時代区分となる。この時代は、武士の台頭と争い、または枚聞神社、松尾城、山川港にスポットがあたる。栗林部会長からは、「分かりやすい市史を目指します。併せて新しい史実も可能な限り取り入れていきます」というコメントをいただいた。

「6 近世」は織田・豊臣時代から始まる。江戸時代の指宿、薩摩藩、甘藷や煙草などの産業・文化、今和泉島津家も登場する。この時代、前田勘助日記をはじめ指宿を記録した書物がある。それらの文献を読み解き、それぞれの視点からの指宿を紹介する。幕末の指宿では、浜崎太平次、河野覚兵衛などの偉人を取り上げる。林部会長からは、「近世の指宿市域のことを分かりやすく伝えるとともに、当時の薩摩藩全体や島しょ部との関係など幅広い視点で捉えたい」というコメントをいただいた。

「7 近代」は、明治・大正・戦前・戦中となる。廃仏毀釈や西南戦争、帝国主義が進む中での対外戦争、地域文化や教育、戦後につながる産業を紹介する。平井部会長からは、「歴史の激動の中、指宿に生きた人びとの息づかいが伝わるような市史にできれば」というコメントをいただいた。

第3巻から現代、民俗となる。現代編については、最初に概要、その後部門史となる。原則令和8年3月までのできごとを記載している。部門史の「2 コミュニティ史と市民協働史」は、松下委員に執筆を依頼している。また、「3 校区史」においては、各地域、自治会等と連携しすすめていく。以降、「4 産業史」「5 厚生・福祉・保険医療史」と続いていく。部門史全体に言えることだが、市役所の関係課からの資料収集や意見を参考に、内容を組み立てていく。

資料15ページ中段に、「3 テーマでみる指宿歴史物語」とある。指宿・山川・開聞、それぞれ温泉・港と鯉節・開聞岳をテーマに、各部門の先生方が入り混じりながら記述する。

(議長(委員長))

事務局から2点説明があった。皆様から御意見があればお願いします。

(松下副委員長)

8ページ。織豊政権を近世の最初に置いている。中世として、戦国時代の次に入れるべきではないか。

(事務局)

中世と近世の境目をどうするかは、地域や市史によって見解が異なる。これが決定ではなく、部会で調整して決定したい。

(松下副委員長)

前田勘助日記を取り上げることは意義がある。地域に住んでいると江戸期の郷村、姿がどういふものであったのか、現代にどのように引き継がれているのかを知りたい。民俗学でも取り上げられるだろうが、江戸期の村々の取り上げ方が弱いと感じる。

(事務局)

この章立て案は、各部会で継続して協議をする。編さん委員会の意見を伝え、検討材料としてもらう。

(松下副委員長)

例えば、はぜというものは、南薩地域にとって大変な問題であった。農民は植え付けさせられ、怨嗟の対象であった。そのような思いをどのように記載するか。同時に調所広郷の財政改革に意義があった。農民の姿や感情が見えれば良い。

(事務局)

委員からは、民衆から見た歴史、民衆史を大事にしたいという声もあった。意見として伝えていきたい。

(議長(委員長))

章立て案は、基本事務局が作り、編集委員会が協議した。執筆については、産業、村、生活、どこを中心とするか。地域史に関して、学芸員の講話を聞いたことがあるが、産業、生活、制度が重なる。どこにフォーカスをあてるか。今の意見を参考としてほしい。

(永山委員)

資料7ページ。古代史部会の動きについて説明する。事務局から章立て案をいただき、私の方でも考えて提案した。ただし執筆者の意見は入っていない。現在、執筆者に渡して、どこを書いてもらうか、追加することは何があるかを、投げかけている。現在章立て案を詰めている状態。今日の意見を各部会に伝えれば、反映できる。また、時代の境目については、部会長とも話をしていく。5の特論について、開聞岳の大規模噴火が874年と言われているが、実は違うのではないかという論争がある。ここ3～4年の間に目途をつけることができれば、これを読めば分かるという市史になる。日本全体の研究にとっても有意義なものになる。あわせて章立てについては、変更の可能性があるとすることを伝えておく。

(松下副委員長)

古代のページ数は約100ページ。一番関心があるのは特論だが、何ページぐらいを想定しているのか。

(永山委員)

徳之島町史を執筆したときのことを参考にすると、詳細は別の雑誌に書いて、町史にはダイジェストを書いた。開聞岳の問題は何本も論文が出る。最終的に市民の方には分かりやすくダイジェストで伝える形になる。ここで全面的に展開する方法もあるが、市民の方には難しい内容となる。ページ数は12ページを想定しているが、これについても、調査や執筆を進めるなかで、今後変わる可能性もある。ページ数については、機械的に割り振っているので、ページ数のやり取りは増えてくる。そのためにやや余裕をもったページ割にしている。

(松下副委員長)

特論がでること、これまでの考古学的な編年が見直されることがあるのか。

(永山委員)

考古学的な編年が動くかどうかという点では、考古学の人たちはそれを動かすつもりはない。つまり火山灰が考古学的にどの年代に当たるのか。あと文献記録は動かない。両方とも動かないものをどう整合的に理解していくか。実は去年から、鹿児島大学や時遊館COCCOはしむれの学芸員の松崎さんも研究を続けている。どうも、噴火が2回あったのではないか。そのうち大きなものが橋牟礼川を埋めた。もう1回の噴火は874年であったが、それほど小さくなく局地的な影響しかなかった。例えば火山灰は北の方に流れるなど指宿に影響はなかった。そのような解釈で整合性がとれるのか、検討している。3月には開聞岳の麓で確認調査を行う予定だ。メンバーには中村直子先生も入っている。彼女は宮之前遺跡の調査を行っており、来年度も続けて調査を行う予定だ。いろんな情報を集めて最終的にまとめていく。考古だけでなく、文献や火山学を合わせた形で作り上げようと考えている。そうすると青コラはどうなるのか。それについても今、大西部会長と話し始めている。

(下吹越委員)

図書館職員として、レファレンスでよく利用者の方から質問を受ける内容で、今の市史にないものもある。11ページの「動物の感染症流行と畜産への影響」に狂牛病を追加していただきたい。その他、12ページの産業史において、指宿市独自の伝統野菜や山川地域で盛んだった養蚕について。14ページ、9交通・通信・電力史において、海上交通。明治時代の汽船運行や池田地域から金鉱石の運搬など聞かれる。

また、ホーバークラフトも聞かれる。教育史の学校教育に関して、昔の校歌の歌詞や音源を知りたいというレファレンスがある。この機会に昔の校歌に関する調査をして、記録していただくとありがたい。今はなくなった学校校歌の歌詞と音源、できれば歌っている動画を記録・保存していただきたい。郷土の思い出や愛着は校歌に由来する。また、15ページの芸術文化についても、作家や画家、漫画家、陶芸家、写真家さらに美術館の情報を追加していただきたい。指宿は美術に関する情報が少ない。今後の文化芸術のためにも、そのような情報が欲しい。また温泉に関する項目で、温泉祭についても触れていただきたい。祭という項目は必要。指宿、山川、開聞それぞれのお祭りについての紹介をして欲しい。また、観光に関して観光大鑑はないのかと聞かれる。観光は指宿にとって重要なので、充実した資料が欲しい。その他指宿に海水浴場やプールがあったことが資料として残っていない。そのような細かな歴史が知りたい。また岩崎氏や下竹原氏など、観光業を支えてきた人物について知りたいというレファレンスがある。最後に、民俗について、方言に加えてことわざ、または各地域の昔話を追加していただきたい。音声で聞けるとさらに良い。全体として、索引を作りどこに何が載っているかを明記していただきたい。市史は活用されることが大切。索引があれば市民が調べやすくなる。

また、簡単な使い方のガイドや漫画での紹介があると、活用につながる。

(議長(委員長))

今の提案は、要望として受け止め、記録する。内容は実現可能な部分と予算や時間が必要な部分があるので、事務局で検討していきたい。

(松下副委員長)

大切なのは指宿市の年表。作成には時間がかかる。事務局、ぎょうせいが作るかもしれないが、年表を誤りなく作り上げる意識を持って事業を進めて欲しい。

(議長(委員長))

執筆者については今の段階で変更の意見はない。章立てに関しては、委員の意見を、編集委員会へ繋ぎ、章立てを検討する、反映させていくということでした。承りいただき、進めていきたい。

(議長(委員長))

次に、議題(2)「今後のスケジュール」について、事務局の説明をお願いします。

(事務局)

資料の16ページ。表の1番左に1番から24番まで、市史編さん業務を細分化し、記載している。表の1番上の行に時間の流れを示してある。現在、市史編さん事業は、10番の執筆者依頼まで済んでおり、11番の第1回専門部会の開催を調整している。これから12番、13番と業務を進めていき、14番、原稿の作成・提出の締切を令和9年12月としている。そして、最後の24番になるが、通史編販売を令和11年1月としている。

最後に、資料の17ページ。ここでは、もう少し細かく、令和6年度、令和7年度のスケジュールを示している。まず、編さん委員会。年2回を予定しているが、さきほどご指摘いただいております。要所で開催できるように検討する。次に、編集委員会。年4回予定している。ここでは、各専門部の進捗確認、情報共有、専門部間の調整協議を行う。次に、専門部会は年4回予定としており、年明けから各部会がそれぞれ動き始めている。各専門部は、この1月から3月で第1回目の会議を開き、章立て案と4月以降の調査計画について検討する。月の列に数字が入っているものは、日程調整が済んでいる。最後

に、1番下の専門部会調査だが、部会によっては2月から調査が始まる。月の列に数字が入っているものは、調査計画、日程調整が済んでいる。

(議長(委員長))

先ほど議論になったが、執筆に関する議論の中心は専門部会で行われている。その中で、章立てやどの専門部会で書くかが決まる。あわせて調査をするということだが、調査の具体的な日程についてはここには示されていない。調査期間は大体いつまでに完了する予定なのか。

(事務局)

調査は令和7、8年度に主に進める予定。資料の17ページには3月分まで示しているが、それまでに1回目の会議を開き、各部会で来年度・再来年度の調査計画を立てる。各部会の調査計画を4月の編集委員会で確認する。

(議長(委員長))

令和6年度に各部会で具体的な章立てや執筆範囲・調査計画の協議は済ませて、7、8年度を中心に資料収集や現地調査を進める。その後執筆が始まり、9年度から原稿の作成・提出となるということだ。

(松下副委員長)

問題は16番。つまり査読をどうするか。指宿の市史編さんには監修者がいない。事務局はその点についてどう考えているのか。「ぎょうせい」が指宿市史の査読ができるのだろうか。

(ぎょうせい)

私たちは、指宿市史についての内容に関する査読はできない。文章に対しての査読となる。文章の統一性や適切性についてのチェックを行い、統一性を図る。

(松下副委員長)

専門家が執筆する学術的な内容を、市民目線でわかりやすく記述、表現することが大切。誰がそれを担当、調整するのか、そこが問題になる。

(ぎょうせい)

ここ10年ほど他市では、監修者を置かず、編集委員会、各部会長が責任を持って調整し、事務局に提出するケースも増えてきている。

(永山委員)

私がお他市で携わっているケースも監修者を置いていない。監修者と執筆者の役割分担が難しくなる。部会長や編集委員会で責任を持つ方が実務的。市民目線で分かりやすい表現にすることについては、市史編さん室で指宿の歴史に詳しい地元の方に、事前に原稿を読んでもらい意見をもらう。それを部会長、執筆者に返すことでクリアできる。つまり専門的な内容については、部会長が責任を持つ、市民目線での表現については、編さん委員や市民に意見を伺うことが考えられる。

(松下副委員長)

そのようなことが、スケジュールに落とし込まれていない。編さん委員も原稿を確認するなら、事前の用意や時間の設定が必要。

(永山委員)

あとは進め方の問題。初校ゲラを確認するのであれば、絶対に間に合わない。各執筆者から原稿が提出されたら、ぎょうせい並びに編さん委員に提出する。1人が全3冊に目を通すことはできないので、原稿を分担する。今後の編さん委員会でその流れや役割分担を協議していい。

(松下副委員長)

資料5の番号14・15に編さん委員の確認を入れておかないといけない。

(議長(委員長))

各原稿は部会長の確認の上で提出される。資料5の番号15では、事務局での原稿確認に半年近く時間をとっている。この期間が松下委員が言うように、様々な視点で原稿チェックしていく作業となる。作ることに意義があるのではなく、作ったものをたくさん

の人に見てもらふことが大切。そのような編さん委員会の方針に沿っているかをチェックする。専門的な内容の事実確認は難しいが、言葉の選び方など、できる限り、読みやすく、わかりやすく、伝わりやすくということを前提にチェックをする。正誤表についても、この時点から多くの視点で、回数を重ねることで、限りなく間違いを少なくしていきたい。

(松下副委員長)

初校，再校，念校と3回の確認がある。他市において，正誤表というものは，どの程度出ているか。

(ぎょうせい)

正誤表は1年後に出すことを推奨している。いろいろな方から意見が出るので，緊急性がなければ，ためたところで出す。ただし何ページにもなる正誤表を出した記憶はない。最近多いのは，正誤表をウェブで表示するやり方。ウェブであれば，更新しても費用がかからず，即時性を持って公表できる。修正0を目指したいが，なかなか難しい。

(松下副委員長)

正誤表は少ない方がよい。さきほどいろいろな視点で相互チェックをするとあったが，誤りを少なくするように考えてほしい。もう一つ考えることは販売戦略。その戦略を立てておかないと「作ったけれども何部売れるか分からない」となる。旧指宿市誌は，図書館に何百冊と在庫が残る。山川町史は1冊も在庫がない。なぜなら販売戦略を作って売ったからだ。

(下吹越委員)

市史を作るスケジュールはあるが，どうやったら売れるか，見てもらえるかという販売や宣伝のスケジュールがない。広報紙の特集や回覧板，動画作成，SNSでの発信計画があっていい。市民が興味を持ち「買いたい」と思う販売や宣伝の戦略を作る必要がある。新たな市史がでることで，旧指宿市誌も注目される。セットで販売するなど，古い市誌の活用も考えて欲しい。

(議長(委員長))

事務局として今は作ることに注力している。今後，販売について考える時間が出てくる。今の意見を踏まえて，いろんなプランを考えてほしい。今，DX化が進み，市民の意識も変わりつつある。デジタルの活用も踏まえて検討してほしい。

(議長(委員長))

今後のスケジュールについては，基本的にはこの形で，その上で編さん委員の意見を踏まえて進めて欲しい。その他，特にないようですので，本日の協議事項は全て終わる。

5 その他

(市長(委員長))

協議事項の他に，全体を通して何か質問や意見はないか。

(下吹越委員)

市史編さん室が指宿図書館にあるので，事務局の動きも気になっているが職員が3人というのは非常に難しい。ただ，予算もあるので，簡単に人を増やすということもできない。これからいろいろなことが起きて庶務が増え，負担が増える。提案として，そのお手伝いをしてくれる市民ボランティア制度を作る。個人情報といった情報管理もあるので，全てはお願いできないが，地域おこし協力隊やNPO，文化協会，高校生，大学生など，関心がある人を入れるのも，後世のためにも大事だ。ボランティア登録や管理を誰がするのが問題になるが，市史編さん室と市民ボランティアをつなぐ人がいて，采配してもらえれば上手く進む。市民が関わっていることが大切。購入や郷土への愛着，誇りにつながる。

もう一点，市史ができるのは本当にありがたい。ただ，子供たちが指宿市のことを調べる時に使えるものがない。今の郷土史は小学生，中学生には難しい。発刊後，子ども用の市史，ダイジェスト版ができて，子供が自分で調べられればいい。今回の市史の抜粋で副読本を作る。子どもたちに市史を届ける工夫をして欲しい。

(松下副委員長)

私は指宿検定の委員をしており公式ガイドブックがある。市史の対象者を拡充して、文体を変えていけばそういうものになる。

(市長(委員長))

副読本については、子どもだけでなく大人にとっても分かりやすく勉強しやすい。またボランティアについては、業務にとってプラスになる場合、重荷になる場合があるので、どのようにすれば良いか事務局で検討して欲しい。

(事務局)

今の段階においてボランティアは考えていなかったもので、意見として承りたい。

(松下副委員長)

先生方が指宿についてどのような論文を書いたのか見せて欲しい。

(事務局)

事務局の方で準備をしたい。

(永山委員)

近代の執筆者で指宿に関する論文を書いている人はいない。これを機会に調査、執筆を行う。他の地域では実績がある方々なので、これを機会に研究を深めていただく。

(市長(委員長))

執筆者全員が指宿に関する論文を書いているわけではないということだ。それでは、他に意見もありませんのでこれもちまして、会議を終わりたい。

6 閉会

(事務局)

それでは、以上で第2回指宿市史編さん委員会を終了する。